

悪い夢を見ているような・・・

『冥途・旅順入城式』^{ひゃっけん} 内田 百閒・作

出版社：岩波書店（岩波文庫・刊） ISBN：978-4-00-311271-7

百閒さあん！随筆では愛らしいキャラクターの百閒さんが、創作となると別の顔を見せる。この本の中に収録されているのはどれも短編だが、百閒の師匠であった夏目漱石の『夢十夜』のような作品ばかりである。（特に第三夜ですかね）

主人公が歩いている（歩いている理由は本人も分からない）。ただひたすら歩いている。

街の中だったり、寂しい田んぼ道や土手道（土手は現世と異界の境界だとか）だったり。そのうち人がいなくなり、空が不思議な光を帯びてきて、不穏な雰囲気になり・・・。

そう、何かが現れるのです。そう、何か得体のしれないものが。

主人公は逃げようとしませんが、身体が思うように動かない。悪夢の中の私たちのように。

全てにおいて、理由や辻褄は合いません。そう夢の中のように。

私は、収録作の中でも表題作「冥途」が絶品だと思います。さあ、「百閒」ワールドへいらっしゃい！

桶川市立中央図書館スタッフが選んだオススメ本「こわい話、ふしぎな話」

『埼玉の怖い話』桜井 伸也・著

出版社：TOブックス ISBN：978-4-86472-465-4

本当に怖いおはなしです。

『日本現代怪異事典 副読本』朝里 樹・著

出版社：笠間書院 ISBN：978-4-305-70878-6

怪異や都市伝説に対するお話しと考察が楽しめる一冊です。

『オカルト伝説 人を魅了する世界の不思議な話』

ナショナル ジオグラフィック・編

出版社：日経ナショナルジオグラフィック社 ISBN：978-4-86313-477-5

怖いけど気になる…見てみたい…
なぜか興味を魅かれる不思議な世界へ

『世界の伝説と不思議の図鑑』

サラ・パートレット・著 岩井 木綿子・訳

出版社：エクスナレッジ ISBN：978-4-7678-1913-6

恐ろしくも美しい図版が多数。
伝説と超常現象の図鑑です。

『護符と呪文の秘密』

アミュレット、タリスマン、
チャームの不思議

マリアン・グリーン・著 駒田 曜・訳

出版社：創元社 ISBN：978-4-422-21541-9

古代からの魔術の知識を解き明かす一冊です。

テーマに沿った本を
図書館に
蔵書があるものから
選んでみました。
図書館を
是非ご利用ください。



OKEGAWA hon プラス+とは

OKEGAWA hon プラス+イベントスペースでは、OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）が主催して博物館、大学、出版社等と連携し、桶川の市民サービス向上のため、子ども向けから大人向けまで幅広い世代を対象とした学びのサポートをしています。

OKEGAWA hon プラス+でのイベントの予定についてはこちらをご覧ください▶



おけがわマイン 3F

〒363-0022 埼玉県桶川市若宮1-5-2

OKEGAWA hon プラス+

☎ 048-786-6353 桶川市立中央図書館

発行者：OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）
「202511」



OKEGAWA hon プラス+ 通信

No. 31

不定期発行



テーマは

こわいはなし・ふしぎなはなし

近年、怖い話や怪談は再び大きな注目を集めています。平成初期に『リング』が登場して以降、しばらく落ちていた時期を経て、令和の今、日本の出版界にはホラージャンルの新しい書き手や佳作が次々と生まれています。

けれど、怖い話はフームとは関係なく、いつの時代にも語られ続けてきました。なぜ怖い話は、どこでも自然と生まれ、周囲の人々はそれを聞きたがり、語り手はつい誰かに話してしまうのでしょうか。

伝えきれなかった思い、もう一度会いたいという願い——。そんな感情が幻影となって立ち上がり、物語として語り継がせる力が働いているのかもしれませんが。あるいは、断片的な「わからなさ」の背後にある真相へ、少しでも近づきたいという人間の好奇心なのかもしれません。今回は、さまざまな時代、テーマ、表現方法による“こわい・ふしぎ”の読み物を広く集めました。

気になるものを見つけたら、ご自身の得意・不得意とも相談しつつ、ぜひゆっくりとお楽しみください。



怖ろしいものがたり

みちのくの人形たち

FUKAZAWA SHICHIRO

深沢七郎



中公文庫

『みちのくの人形たち』^{つさあ} 深沢 七郎・著

出版社：中央公論新社（中公文庫・刊） ISBN：978-4-12-205644-2

ある日自分の家に、近くの工場に出稼ぎに来ているという東北なまりの三十五、六歳くらいの男が訪ねてきて、「この、畑の土を見せていただきたいです」と言う。「初めて逢ったばかりで警戒気味だった私はこのヒトとは長いあいだ交際ってきたヒトのように思えてきた。」

そこから主人公は何かに導かれるようにみちのくの山村を訪ね、異界を見ることになるのだ。物語の最後は衝撃的で、まさに「総毛立つ」思いをするのだが、ラストを読んでからこの冒頭に戻ると、何気ないようで既に違和感を覚え、怖ろしい。

本当にあったのではないかと思わせ、なんともやりきれない。しかもこの日本ではるか昔から続けられ、どれだけの子どもたちがそうやってきたのか、と重苦しく感じざるを得ないその因習。それはやむを得ないことなのか、本当に悪いことといえるのかとも思わせる。だから救いようがない。自分の先祖も、と身につまされる。みなが共有する暗い記憶。

読者を異界に誘い込む淡々とした文章と、みちのくの「旦那さま」といわれる人物の、どこまでも「丁寧」物腰、が逆に怖ろしい。



見つけてくださってありがとうございます

『文庫版 近畿地方のある場所について』

背筋・著 出版社：KADOKAWA（角川文庫・刊） ISBN：978-4-04-102655-7



映画化もされた、令和のホラーブームをけん引する見事な一冊です。
本作の大きな特徴は、インターネット上の匿名掲示板で交わされる書き込みをそのまま引いてきたような文章で構成されている部分が多いこと。本当にどこかのスレッドに存在したのでは……と思わせる“ドキュメンリー風”の質感が、強烈なりアリティをもたらしています。読書はあまりしないけれど、ネットの文字文化には日常的に触れている——そんな人には非常に読みやすく、なじみやすい手法で書かれています。一方で普段から紙の本を読む人には、ネット特有の文体やコミュニティのざわめきを眺められる楽しさがあり、小説としての新鮮味を感じられると思います。
登場するモチーフは、山、土着的な風習、都市伝説、幽霊、文字列の不気味さ……と、“なんか怖い”要素が満載。物語が進むにつれ、それらが

実はひとつの真相に向かう多面体の断片なのは、という仮説へと収束していく構造は、ゴージャスなミステリーとしての魅力も十分です。

冒頭でも触れましたが、本作では、現代のネット空間があまりにも生々しく描かれています。書き込みに集まる有象無象の声、真偽不明の情報の浮遊感——それらが作中の怪奇現象の「わからなさ」と呼応し、“多分ウソだろうけど、もしかしたら本当にあるのかも……”という、想像力のギリギリの縁をずっと刺激し続けます。怖いです。

山では何が起こるか分からない

『山怪実話大全 岳人奇談傑作選』

東 雅夫・編 出版社：山と溪谷社（ヤマケイ文庫・刊） ISBN：978-4-635-04964-1



山の中は人間の領域ではなく、まさに「異界」で、そこでは多くの人間が死んでおり、異形なものが現れたり、異常が起きてしまっても不思議ではない。山に入った者、山で一夜を過ごす者はどこかでそれを覚悟しているのかもしれない。

この本では、登山家たちが実際に山で出逢った様々な出来事が語られているが、「山でならそんなことがあったとしても仕方がない」と思わざるを得ない。

山に入るときは、くれぐれも気を付けましょう（最近は、「クマ」という別な恐怖もあるけれど）。

・坂田図書館に蔵書があります

みじかくておもしろい話、読みませんか

『冬の子 ジャック・ケッチャム短篇傑作選』

ジャック・ケッチャム・著 金子 浩・訳
出版社：扶桑社（扶桑社ミステリー文庫・刊） ISBN：978-4-594-09878-0



スティーヴン・キング絶賛！
ケッチャムは、短篇も凄かった。
モダン・ホラー界の鬼才が贈る珠玉の19作。
「オフシーズン」の後日譚他、プラム・ストーカー賞受賞の「箱」「行方知れず」を含む、日本独自編集の傑作選登場。

1980年代ごろからアメリカで活躍した作家、ジャック・ケッチャム。本書は彼の短編のみを 19 作集めた傑作選で、ホラーの棚に置かれているだけでは惜しいほど、ジャンルを越えて楽しめる作品がずらりと並んでいます。

著者がロック音楽好きという背景もどこか文章に影響しているのか、文体や情景は軽やかで現代的。翻訳も読みやすく、どの作品も短い中に起承転結がきっちり収まり、ラストでひっくり返してくるものもあるので、ミステリーやファンタジーなど「物語好き」の人もきっと満足できるはず。ただし、ホラーです。ハッピーエンドはどうか期待しないでください。

作品の傾向としては、超常現象がほとんど登場せず、むしろ身近な人とのあいだで凄惨な出来事が起きてしまう“ヒトコワ”が中心。残虐さはあるものの、それ以上に人間の悲哀や弱さといった内面性の描写、そしてシナリオの巧みさが強く印象に残ります。「悪とは何か」という問いが、全体を静かに貫いているようにも感じました。

個人的なお気に入り、不思議な箱を目にしただけで運命が変わっていく短編『箱』。あなたもぜひ、この中から忘れられない一作を見つけてみてください。

「粋」を感じる幽霊、小気味よく読める怪談話

『岡本綺堂 怪談選集』 岡本 綺堂・著 結城 信孝・編

出版社：小学館（小学館文庫・刊） ISBN：978-4-09-408411-5



明治 5 年生まれの岡本綺堂は、明治・大正・昭和の三つの時代を生きた作家です。代表作のミステリー作品、『半七捕物帳』で知られる一方、歌舞伎の脚本家としても確固たる地位を築きました。

そんな綺堂が遺した読み物の中でも、とりわけ味わい深いのが「怪談」。いわゆる民俗的な“怪”の怖さよりも、どこかカラッとした軽やかさがあります。登場する幽霊や怪異からは、かつて「ひと」であった頃の思いが

そのまま地続きになって滲み出ていて、生の儚さや無念がそっと胸に残ります。恐怖よりも、静かな切なさが勝る怪談です。

綺堂の生まれは明治ですが、作品の舞台には江戸の香りが濃く漂い、読み進めるほどに時代劇のような街並みや和装の人々の姿が自然と浮かんできます。今回の文庫には、編者が厳選した 13 の短編を収録。どれも眠れなくなるほどの恐ろしさではなく、夜長の時間に一話ずつ、江戸後期の暮らしへとすずかにタイムスリップするような気持ちで味わうのがおすすめです。